

「トポス会議」全10回を終えて

国の豊かさはGDP（国内総生産）で表されますが、国の「知性」はどう表せるのでしょうか。ノーベル賞の受賞者数や大学のランキングでしょうか。その国が抱える課題へ対応する力や、未来へ向かって進化する営みを生み出す知恵こそが、その国の知性を表していると思います。

課題先進国といわれる日本は、いままさに知性豊かな国へと進化する絶好の機会を得たと言えるでしょう。経済的な成長が鈍化してくると、その国の存在感が薄れる傾向がありますが、このような時こそ、成熟国家として、世界へ、そして未来へ、その知恵を発信していくことが重要であると考えます。

2012年9月21日、「人間の知性とコンピュータ科学の未来」と題して、第1回トポス会議が開催されました。いまでこそ多くの人々が口にするシンギュラリティをいち早く取り上げ、人間の知性とコンピュータの関係を世界の賢人たちと議論しました。

以後、「ソーシャル・イノベーションと21世紀の資本主義」「日本の安全保障とグローバル・ビジネス」「イノベーター・イノベーション」「日本のソーシャル・ランドスケープを構想する」「エイジング3.0」「賢慮資本主義宣言」「『産業・社会・環境』革命の衝撃」「都市のイノベーション」「人類世の“ヒューマン・ビルディング”」と、合計10のテーマで開催してまいりました。

これらのテーマをいま振り返ってみると、ここ数年の世界の激しい、時に驚愕するような変化を予感させる議論を行ってきたようにも感じます。

16カ国100人以上の賢人にご登壇いただき（ビデオメッセージ収録者を含む）、のべ2200人以上の方々にご参加いただきました。この場を借りて、あらためて御礼申し上げます。また、トポス会議の趣旨にご賛同いただき、協賛・後援して下さった皆様にも、心より感謝いたします。たくさんの方々にご共感され支えられた賢人ネットワークこそが、日本から知恵を発信していくための原動力になると信じております。

トポス会議は当初、全10回をもって終了することを予定しておりましたが、多くの方々から継続を望む声をいただき、現在「シーズン2」の開催を計画しております。シーズン1で培った世界の賢人たちとのネットワークをさらに発展させ、より充実した内容にできるよう努力する所存です。シーズン2にて、皆様と再会できることを楽しみにしております。

事務局を代表して

株式会社富士通総研

取締役執行役員常務 経済研究所長

徳丸嘉彦

Aging 3.0

Wise Ways of Living, Working, and Thinking towards 2050

エイジング 3.0

——2050年に向けた「賢慮なる生き方、働き方、知のあり方」

日時●2014年7月3日(木) 13:00~20:30

会場●六本木ヒルズ森タワー49F アカデミーヒルズ内タワーホール

主催●ワールド・ワイズ・ウェブ・イニシアティブ(w3i)

協賛●株式会社TKC、富国生命保険相互会社、

株式会社構造計画研究所、在日フランス大使館、アンスティチュ・フランセ日本

後援●国立大学法人政策研究大学院大学、株式会社富士通総研

世界の総人口が90億人を超えるにもかかわらず、我が国は1億人を割り、しかも65歳以上が4割近くを占め（15歳未満は何と1割程度）、平均寿命は女性が90歳、男性が83歳を超える——。これが、各調査機関が予測する21世紀半ばの日本である。加えて、医療のさらなる高度化により、平均寿命はさらに伸延するという予測もある。

こうした高齢化は世界的な傾向であり、実は人類史上初めての経験である。幸か不幸か、日本はそのフロント・ランナーであり、それゆえ「課題先進国」「課題解決先進国」というスローガンも生まれてきた。

高齢化について議論される時、もっぱら現在抱えている課題、近い将来直面するであろう課題が取り沙汰される。それは、いわゆる「エイジング2.0」と呼ばれるフェーズのものであり、多くが喫緊の課題であり、まさしく解決が急がれる。

ただしその一方で、未来の課題について思索し、顕在化する前に備えることも等しく必要である。そうした課題がいかに先進的であろうと、これまでのように課題が顕在化した後に解決策を議論しては、泥縄の内容になるばかりか、課題解決先進国など望むべくもない。しかも、長寿リスクの話ばかりでは暗くなる一方である。

第6回トボス会議では、次なる「エイジング3.0」の世界について議論が交わされた。たとえば「若さや老いの概念や尺度が変わる」「生き方や働き方が非連続的に変わる」「既存の経済や社会システムが実態と乖離していく」など、近未来のニュー・ノーマル（新常識）について、高齢化問題に先進的なアプローチで取り組んでいる国内外の医療従事者をはじめ、狂言界の権威、倫理学者、デザイナ、高齢者コミュニティの推進者などを招聘し、まさしく学際的な議論が展開された。

プログラム

13:10—13:30

基調講演

「狂言を通じた“生”」

狂言師 野村万作

13:30—15:00

トポス①

「賢慮と年齢の関係性」

〈パネリスト〉

東京大学名誉教授 養老孟司

アドバンシング・テクノロジー大学教授 ナターシャ・ヴィタモア

慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程 長門裕介

〈モデレーター〉

多摩大学教授 w3i発起人 紺野 登

キャスター | 草野仁事務所 都築紗矢香

*トポス②③も同じ。

15:00—16:30

トポス②

「超長寿社会における『知』」

〈パネリスト〉

IDEOシニア・パートナー グレッチェン・アッディ

医療法人社団鉄祐会理事長 | 一般社団法人高齢先進国モデル構想会議理事長 武藤真祐

ハーバード大学医学部教授・救急医 | ペス・イスラエル・ディーコネス・メディカル・センターCIO ジョン・ハラムカ

同上 ナターシャ・ヴィタモア

16:45—18:00

トポス③

「知の生態系を問う」

〈パネリスト〉

シルバーバレー理事長 | ドーロAB CEO ジェローム・アルノー

データセクション取締役会長 | デジタルハリウッド大学教授 橋本大也

同上 グレッチェン・アッディ

同上 武藤真祐

18:00—18:30

総括

一橋大学名誉教授 | w3i代表発起人 野中郁次郎

18:30—20:30

ネットワーキング・セッション (於六本木アカデミーヒルズ内ライブラリー・カフェ)

〈司会・進行〉

プライム・コーポレーション代表 武部恭枝

富士通総研経済研究所実践知研究センター上級研究員 大屋智浩

スキット

俳優 松尾優作

「狂言を通じた“生”」

野村万作氏みずから演じた狂言『木六駄』（きろくだ：太郎冠者が、伯父の家に木と炭を六駄ずつ運ぶ途中で酒を飲み、酔った勢いで木の六駄を茶屋の亭主に与えてしまい、いい気持ちで伯父を訪ねてしかられるという演目）の一シーンをビデオで観た後、亡父・野村万蔵はこの大変難しい曲を得意としており、これまでその教えどおりに繰り返して演じてきたが、ようやく真意がわかってきた、と現在の真情を吐露。

つづいて、100歳の古狐を演じる『釣狐』（つりぎつね）という曲——「猿に始まり、狐に終わる」という言葉があるように、この曲を演じられて一人前として認められる——にこだわり続け、これまで26回（他の狂言師は数回程度）も演じてきたことを引き合いに出し、「型」といった基礎は古臭くて、創造的ではないと思ったこともあったが、「我慢して我慢して型にはまることを一生懸命やったあかつきに、自分の世界が開けてくる」もので、それゆえに「伝統は生き物」なのでであると述べた。

トボス①

「賢慮と年齢の関係性」

冒頭、本会議の1カ月前に『自分の壁』（新潮新書）を上梓した養老孟司氏より、自分の生き死には自分の勝手と多くの人が思っているが、実は「人が生きているのは人のため」なのだ、と問題提起がなされる。ここで、「超高齢社会は明るいのか、暗いのか」についてムードメーター（来場者が色紙を挙げて自分の回答を表明することで会場全体の考え方を色で表す手法）が行われる。

その後、日本留学中に自身の嬰兒を失い、その不幸な経験から「寿命の延伸」さらには「ヒューマン・エンハンスメント」（マシンによる人間の肉体的・機能的な強化）に関する研究、生死をテーマとする表現・創作活動を行ってきたナターシャ・ヴィタモア氏、そして長寿、すなわち死が遠ざかることは必ずしも幸福ではなく、社会制度上の限界、人間の生活上の不自然さから見ても、むしろ不幸になる不安やリスクを高めるのではないかと懐疑的な見解を提示する倫理学者の長門裕介氏という、異なる視点からのプレゼンテーションが行われた。

立脚点は三者三様であったが、長門氏がアリストテレスを引きながら「自分の人生における本当の目的」という視点を提示したことで、これが議論の核心となり、超高齢社会だからこそ「自分自身」や「目的」について再考しなければならない、という点で一致を見る。そこから派生して、「加齢と賢慮、長寿と賢慮の関係」、さらには「地方創生における高齢者の意識改革（身の引き方）」についての言及がなされた。

トボス②

「超長寿社会における『知』」

モデレーターで発起人の一人である紺野登より、ルネッサンス期のフィレンツェを代表する画家ティツィアーノ作の“Allegory of Prudence”（賢慮）という寓画のスライドが紹介される。そこには、ライオンとオオカミとイヌの頭が並び、それぞれの上に壮年の男性、老人、若者の顔が描かれており、実行力、狡猾さ、機敏さや多様性という賢慮を構成する主たる3要素を表現しているという。ひるがえって、超高齢社会において、こうした賢慮をいかに育んでいくのか、これがトボス②の具体的な議題として示された。

これに対して口火を切ったのが、グレッチェン・アッディ氏である。彼女は、アメリカの有名なアニメ作家ハンナ・バーバラの『宇宙家族ジェットソン』のイラストを使いながら、未来のあるべき姿、より具体的にはエイジング（加齢）を前向きにとらえ、そこに秘められたチャンスや可能性を創造・支援し、だれもがそれを享受できる社会をデザインすることの必要性を訴えた。ここで、「高齢者が増えると賢慮も増えていくか」というムードメーターを実施。

続いて、在宅医療の現場を代表して武藤真祐氏は、社会技術の場合、イノベーションは非連続的ではなく漸進的であり、人々の一定のコンセンサスを経ながら導入・普及していくと前置きしたうえで、目下の現実では、健康寿命の延伸、地域医療のばらつき、高齢者のITリテラシー等の問題を指摘。

医師でありIT専門家であるジョン・ハラムカ氏は、自身の家族の事例を引きながら、「人生の意味」「クオリティ・オブ・デス」（臨終の質）について考えることが大切であると問いかけた。

これらのプレゼンテーションの後、トボス①で登壇したヴィタモア氏を（途中アッディ氏も）交え、高齢者の賢慮、特に実行力、機敏さや多様性など衰退に向かう性質について意見交換がなされた。最後に「超長寿社会において若者が活躍する場は増えるかどうか」というテーマでムードメーターを行う。

トボス③

「知の生態系を問う」

マーケット（市場）ではなく、関係性の集合体である「エコシステム」という視点から超高齢社会を構想してみたい、と紺野から問題提起。フランスでシルバーバレーという組織を主宰するジェローム・アルノー氏が、「シルバー経済とエコシステム」というテーマで、高齢者と共存する次世代コミュニティのケーススタディとして、イル・ド・フランス地区における同組織の実験とビジネスモデルを紹介。

世代間の共進化を訴えるこのプレゼンテーションを受けて、シニア世代にもITを教えている橋本大也氏が、世阿弥が著した能楽論書『風姿花伝』に記されている「去来の花」（人には年齢に応じて咲く花がある）を皮切りに、デヴィット・リースマンの『孤独な群衆』（みすず書房）、エドガー・シャインの『人を助けるとはどういうことか』（英治出版）、アレクサンダー・ハラヴェの『ネット検索革命』（青土社）などを紹介しながら、世代間コラボレーションの意義と可能性を示唆した。

アッディ、武藤両氏がここに加わり、トボス②の最後のムードメーター（若い世代の役割）を踏まえつつ、エイジング3.0におけるビジネス、製品やサービスのあり方、若者が高齢者を指導するリバース・メンタリング、世代間コラボレーションを担保するオープンシステムなどに議論が及んだ。また、トボス①と同じ質問のムードメーターを試みたところ、「超高齢社会は明るい」という回答が6割に上昇した。



グレッチェン・アッディ Addi, Gretchen

IDEO シニア・パートナー。未来の職場環境のシナリオを描くプロジェクトをはじめ、患者と家族の経験を通じて構築されるヘルスケアの未来に関する調査、退職後の暮らし方に関するコンサルティング、「エイジング・イン・プレイス」（自分が住み慣れた場所で年齢を重ねていくこと）を念頭に置いた製品やサービスのコンセプト開発などのプロジェクトに従事。



ジェローム・アルノー Arnaud, Jérôme

パリにおいて高齢者の就労と雇用創出を促進するシルバーバレーの理事長。スウェーデンの国営企業ドーロ AB および仏子会社ドーロ SAS の CEO。グランゼコール（国立理工科学院連合）の一つ、エコール・セントラル（中央工業大学校）にて土木工学修士号を取得。2013 年、高齢者支援の活動が評価され、仏政府よりフランス文化功労賞を受賞。



ジョン・ハラムカ Halamka, John

ハーバード大学医学部教授・救急医。またバス・イスラエル・ディーコネス・メディカル・センター CIO として、3000 人の医師、1 万 4000 人の病院スタッフ、200 万人の患者が利用する IT システムを監督している。そのほか、ニューイングランド・ヘルスケア・エクスチェンジ・ネットワーク（NEHEN）議長、米国国家医療 IT 標準化委員会共同議長、マサチューセッツ医療 IT 諮問委員会共同議長を兼ねる。



橋本大也 Hashimoto, Daiya

データセクション取締役会長。ソリッドインテリジェンス取締役パートナー。デジタルハリウッド大学教授、ならびに多摩大学大学院経営情報学研究所客員教授。そのほか、データエクスチェンジ・コンソーシアム理事長などを務める。主な著書に『情報考学』（主婦と生活社、2006 年）、『情報力』（翔泳社、2009 年）、『データサイエンティスト』（SB 新書、2013 年）などがある。



武藤真祐 Muto, Shinsuke

医療法人社団鉄祐会理事長、ならびに一般社団法人高齢先進国モデル構想会議理事長。医学博士。米国公認会計士。1971 年生まれ。東京大学医学部卒業後、同大学大学院医学系研究科博士課程修了。宮内庁の侍医、マッキンゼー・アンド・カンパニーを経て、2010 年に東京都文京区に、また 2011 年には宮城県石巻市に在宅医療診療所を開設。内閣官房 IT 戦略本部医療分野の取組に関するタスクフォース、厚生労働省緩和ケア推進検討会、総務省スマートプラチナ社会推進会議等のメンバーを務める。



長門裕介 Nagato, Yusuke

慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程。日本学術振興会特別研究員 DC。1987年生まれ。慶應義塾大学大学院修士課程修了。現代の倫理学および歴史の哲学の研究が専門。現在、人生の統一性と価値の問題について博士論文を準備中。共著書に『現代社会思想の海図』（法律文化社、2014年）がある。



野村万作 Nomura, Mansaku

狂言師。重要無形文化財各個指定保持者（人間国宝）。ハワイ大学ならびにワシントン大学客員教授。1931年生まれ。早稲田大学文学部卒業。3歳で初舞台。80年を超える芸歴を通し、国の内外を問わず狂言の普及に尽力。紫綬褒章、旭日小綬章を受章。著書に『太郎冠者を生きる』（白水Uブックス、1991年）、『狂言三人三様・野村万作の巻』（岩波書店、2003年）などがある。



ナターシャ・ヴィタモア Vita-More, Natasha

米アリゾナ州にあるアドバンスング・テクノロジー大学教授。ヒューマン・エンハンスメント技術の専門家ならびにアーティスト。ヒューマニティ+理事長、インスティテュート・フォー・エシックス・アンド・エマージング・テクノロジーズ（IEET）のフェローを兼ねる。また、『トランスヒューマニスト・リーダー』誌や『フィロソフィー・オブ・ザ・フューチャー・ヒューマン』誌の共同編集長を務める。米『WIRED』誌から「革新的変化の先駆者」、『ヴィレッジ・ボイス』誌からは「超高齢社会のロールモデル」と称される。



養老孟司 Yoro, Takeshi

東京大学名誉教授。1937年生まれ。東京大学医学部を卒業後、同大学助手・助教授を経て、解剖学第二講座教授。医学博士。人間のあらゆる営みは脳という器官の構造に対応しているという「唯脳論」を提唱したことで知られる。著書・共著ともに多数。その中で『からだの見方』（筑摩書房、1988年）がサントリー学芸賞、ミリオンセラー『バカの壁』（新潮新書、2003年）が毎日出版文化賞を受賞。

*登壇者の略歴は、第6回トボス会議が開催された時のものです。

Wise Capitalism Manifesto

Shaping A New Capitalism from Japan's Shores

賢慮資本主義宣言

——日本発の「資本主義」を構想する

日時◎2014年11月27日(木) 13:00~20:30

会場◎六本木ヒルズ森タワー49F アカデミーヒルズ内タワーホール

主催◎ワールド・ワイズ・ウェブ・イニシアティブ(w3i)

協賛◎株式会社TKC、富国生命保険相互会社、株式会社構造計画研究所

後援◎国立大学法人政策研究大学院大学、株式会社富士通総研

「経済学の父」アダム・スミスが著した『国富論』は、まさしくイノベーションであった。それ以前では、人々が公共の利益を考え、倫理的に行動しなければ、よい社会は成立しないと考えられていた。しかしスミスは、人々は公共の利益など考えず、おのれの利益だけを追求していれば、結果的に「見えざる手」に導かれ、公共の利益は実現すると説いたのである。

このパラダイム・シフトは、その後（自由放任主義に基づく）「市場原理の資本主義」へとたどり着く。チューリップ球根に始まるさまざまなバブル経済、1929年の大恐慌やブラックマンデーなどの金融危機はもとより、公害や環境破壊、行き過ぎた株主価値経営、経営者のモラル・ハザードなど、その背後には市場原理の資本主義への盲信がある。

もちろん、これまでに幾度となく批判と警告がなされてきた。資本主義のさまざまな矛盾を指摘したカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルス、利潤の追求が目的化していることを批判したマックス・ウェーバー、（自由放任主義者ではあるが）合理主義に異を唱えたフリードリヒ・ハイエク、同様に経済合理的な経営行動を戒めたピーター・ドラッカーなど、枚挙に暇がない。

そして、2008年のリーマン・ショックを受けて、市場原理の資本主義への批判が再び始まった。『ハーバード白熱教室』のマイケル・サンデルは「正義」の欠如を、ジョセフ・スティグリッツやポール・クルーグマンをはじめ、話題の大著『21世紀の資本』を著したトマ・ピケティらは「容認ならざる所得格差」の罪を指摘した。さらには、ローマ法王が「排除と不平等の経済」であると異例の苦言を呈した。

その一方で、アカデミズムのみならず、政治や産業界のリーダーたちが、これに代わる「新しい資本主義」についての議論を始めている。ところが日本では、こうした本質的議論は脇に追いやられ、触れられることもない。これでは、また20世紀の繰り返しである。

第7回トポス会議では、本会議の核となる概念「賢慮」（実践知）に基づき、マクロ経済や経済思想、マネジメントの各研究者、そして産業界のワイズ・リーダーらとともに、新しい資本主義のあるべき姿について熱い議論を交わした。

プログラム

13:10 - 14:50

トポス①

「世界経済の挑戦」

〈パネリスト〉

東京大学大学院経済学研究科教授 吉川 洋

東洋大学経済学部准教授 太子堂正称

〈ビデオ・メッセージ〉

マギル大学教授 ヘンリー・ミンツバーグ

テキサス大学オースティン校教授 ジェームズ・K・ガルブレイス

〈モデレーター〉

多摩大学教授 | w3i発起人 紺野 登

キャスター | 草野仁事務所 都築紗矢香

*トポス③も同じ。

14:50 - 16:30

トポス②

「賢慮資本主義の可能性」(対談)

評論家 | 元東京大学教養学部教授 西部 邁

京都大学大学院工学研究科教授 | 内閣官房参与 藤井 聡

〈ビデオ・メッセージ〉

同上 ジェームズ・K・ガルブレイス

〈進行役〉

同上 都築紗矢香

16:45 - 18:00

トポス③

「実践知経営がもたらす賢慮資本主義」

〈パネリスト〉

スリーエムジャパン代表取締役社長 三村浩一

シリウス・インスティテュート代表取締役 | 一橋大学大学院国際企業戦略科客員教授 船橋晴雄

福山大学経済学部教授 中沢孝夫

独立行政法人大学評価・学位授与機構教授 田中弥生

〈ビデオ・メッセージ〉

神戸大学名誉教授 加護野忠男

18:00 - 18:30

総括

一橋大学名誉教授 | w3i代表発起人 野中郁次郎

18:30 - 20:30

ネットワーキング・セッション (於六本木アカデミーヒルズ内ライブラリー・カフェ)

〈司会・進行〉

プライム・コーポレーション代表 武部恭枝

富士通総研経済研究所実践知研究センター上級研究員 大屋智浩

スキット

俳優 松尾優作

トボス①

「世界経済の挑戦」

ディスカッションを始めるに当たり、代表発起人の野中郁次郎より、「賢慮」の視点から資本主義を考え直すことが第7回トボス会議の目的であると（ビデオを通じて）宣言がなされる。そしてモデレーターの紺野登からは、ジョン・メイナード・ケインズ、ジョセフ・シュンペーター、そしてフリードリヒ・ハイエクという3大経済学者の思想に注目していることが添えられた。

これを受けて『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ』（ダイヤモンド社）を著した吉川洋氏が「資本主義の過去、現在、未来」というタイトルで、経済における「効率性」と「分配」の問題、分配のあり方をめぐる経済史（ベンサムやミルの功利主義、マルクス／エンゲルスの社会主義やイギリスのフェビアン社会主義等）、そして経済格差に焦点を当てたトマ・ピケティの『21世紀の資本』（みすず書房）などに触れながら、最後に、資本主義を成長させるのはイノベーションであり、シュンペーターは「人口減は商機である」と述べたことを紹介して締めくくった。

つづいて、「現代資本主義にハイエク思想が投げかけるもの」というテーマで、太子堂正称氏が、ハイエクにまつわるステレオタイプの間違いについて指摘・修正を行った。たとえば、ハイエクは自由放任（レッセフェール）主義者といわれているが、必ずしもそうではないこと、彼が強調している自由競争は単なる規制緩和ではなく、緩和後のルールづくりであること、福祉国家を批判しているが、福祉の必要性を主張していることなどである。そして、ハイエクは金科玉条を「致命的な思い上がり」と戒め、自由な活動とそれに伴う知識の結合によってダイナミズムが生まれることを重視したと解説した。

また、海外からビデオ・メッセージが送られてきており、まずジョン・ケネス・ガルブレイスの子息で、経済学者のジェームズ・K・ガルブレイス氏が、最新著 *The End of Normal* (Simon & Schuster) を参照しながら、21世紀のグローバル資本主義に大きな影響を及ぼす要素、すなわち資源、安全保障、デジタル技術に言及。そしてもう一人、世界的なマネジメント・グールーであるヘンリー・ミンツバーグ氏は、「リバランス (rebalance)」というキーワードを提示し、現在のグローバル資本主義は極めて不健全であり、プルーラル・セクター（多元的な社会部門）によるリバランスが求められると述べた。

そして最後に、ハイエクは各人の自由な活動を保証する枠組みの必要性を、シュンペーターは草の根の知やイノベーションの重要性を訴えていたことを会場全員で再確認した。

トボス②

「賢慮資本主義の可能性」

まず藤井聡氏より、「過去2回の世界大戦は、グローバリズムの進行によるものであり、その反省がブレトンウッズ体制であったにもかかわらず、1970年代に新自由主義が台頭し、これがグローバリズムの捲土重来を招き、リーマン・ショックが引き起こされた」と問題提起がなされた。

これに対して、西部邁氏は、グローバリズムはもとより、「構造改革」「イノベーション」を声高に主張したり、繰り返し唱えたりすることへの批判と訓戒をもって同意を示した。また、偏った考え方や主義の弊害を指摘し、自由と秩序、理想と現実、格差と平等、感情と理性、競争と友愛など、すべからくバランスが必要であり、それを欠いた賢慮はありえないと述べた。

再び藤井氏が、ドイツの政治学者ハンナ・アーレントの『全体主義の起源』（みすず書房）、スペインの哲学者ホセ・オルテガの『大衆の反逆』（角川書店）を引いて、人々の「インアビリティ・トゥ・シンク」（思考不全）、とりわけインテリヤ専門家と呼ばれる人たちのそれが問題であると問題提起。

そして西部氏から、グローバリズム（世界に広げる）という点で、資本主義者と社会主義者、共産主義者の思考は同じ、確率分布で予測できない不確実性を特徴とする現在の資本主義は「スタンピード」（家畜などの集団暴走や人間の群集事故など）である、アリストテレスいわく「市場は社会の中に存在すべ

き」、社会性の高いローリスク・ローリターンの事業やプロジェクトが必要等、示唆に富んだ提言が出された。

トポス③

「実践知経営がもたらす賢慮資本主義」

まず、ちょうど2カ月前に住友との合弁を解消することを発表したスリーエムジャパンの三村浩一氏が、米国3Mと日本法人の歴史、組織体制等を紹介した後、46種類あるテクノロジー・プラットフォームを顧客や市場のニーズとかけ合わせて製品開発を行っていること、それは「ニュー・プロダクト・ヴァイタリティ・インデックス (NPVI)」という指標によってモニタリングされていること、また3M初代会長のウィリアム・マックナイトの価値観がイノベーションの文化の原点にあることなどを説明した。

日本企業の経営やガバナンスを歴史的に研究している船橋晴雄氏は、長寿企業40社を調査した自著『新日本永代蔵』（日経BP社）を踏まえながら、永続する企業には、①明確な使命やビジョン、②長期的視点に立った事業経営、③人間を優先する経営、④顧客志向の徹底、⑤社会性、⑥変化を恐れず絶えざる革新を目指す姿勢、⑦質素・儉約の勧め、⑧前述の価値観や経営のあり方を維持・継続する努力を怠らないという姿勢が共通して見られると説明し、ここに日本型資本主義の原点があるのではないかと述べた。

中小企業論の専門家で、これまで1100社以上を実地調査してきた中沢孝夫氏は、「中小企業と賢慮に基づく経営の実践」というテーマで、まずマクロ的に見て、大企業と中小企業はともに発展・衰退しており、中小企業はかわいそうである、地方は遅れているという認識は正しくないこと、製造業とサービス業を分けて考える時代は終わったこと等を指摘。そして、異なる資本主義がぶつかり合うことで新しい知恵が生まれてくるのではないかと述べた。

ピーター・ドラッカーから直接指導を受けた数少ない日本人の一人である田中弥生氏は、ドラッカーの生い立ちを振り返りながら、なぜかつての日本企業を高く評価していたのか、なぜ彼が「非営利組織」にマネジメントの本質を見出したのかについて言及し、ドラッカーは一人ひとりが位置（居場所）と役割を持っている社会が重要であり、企業は経済的機構としてだけでなく、こうしたコミュニティの役割を果たしうると考えていたと説明した。

また、日本の経営を長らく研究してきた加護野忠男氏のビデオ・メッセージでは、かつての日本的経営の特徴を備えるスウェーデン企業を例に引きながら、ゼロサムのアングロサクソン型資本主義が世界的に優位とはいえ、賢慮資本主義の一形態として「共存共栄型資本主義」が考えられるのではないかと提起された。



藤井 聡 Fujii, Satoshi

京都大学大学院工学研究科教授、ならびに京都大学レジリエンス研究ユニット長。第2次安倍内閣内閣官房参与（防災減災ニューディール担当）。1968年生まれ。京都大学卒業後、同大学助教授、スウェーデンのイエテボリ大学心理学科客員研究員、東京工業大学教授等を経て現職。『表現者』塾出身。専門は公共政策論および実践的人文社会科学研究。文部科学大臣表彰等受賞多数。主な著書に『社会的ジレンマの処方箋』（ナカニシヤ出版、2003年）、『列島強靱化論』（文春新書、2011年）、『プラグマティズムの作法』（技術評論社、2012年）、『大阪都構想が日本を破壊する』（文春新書、2015年）等多数。



船橋晴雄 Funabashi, Haruo

シリウス・インスティテュート代表取締役。一橋大学大学院国際企業戦略科客員教授。日本コーポレート・ガバナンス・ネットワーク理事。1946年生まれ。東京大学法学部卒業後、大蔵省（現財務省）入省。主な著書に『イカロスの墜落のある風景』（創世記、1983年）、『日本経済の故郷を歩く』（中央公論新社、2000年）、『あらためて経済の原点を考える』（かんき出版、2001年）『新日本永代蔵』（日経BP社、2003年）、『古典に学ぶ経営術三十六計』（ウェッジ、2008年）などがある。



ジェームズ・K・ガルブレイス Galbraith, James K.

テキサス大学オースチン校ロイド・ミラード・ベンツェン・ジュニア記念講座教授、同大学リンドン・B・ジョンソン公共政策研究科教授。『不確実性の時代』などのベストセラーで知られるジョン・ケネス・ガルブレイスの子息。ハーバード大学卒業後、イェール大学大学院にて経済学博士号(Ph.D.)を取得。邦訳されている著書に、『現代マクロ経済学』（阪急コミュニケーションズ、1998年）、『格差と不安定のグローバル経済学』（明石書店、2014年）がある。



加護野忠男 Kagono, Tadao

神戸大学名誉教授。甲南大学特任教授。神戸大学大学院経営学研究科博士課程単位取得退学後、助手、助教授を経て、1988年に経営学部教授。同大学経営学部長、同大学大学院経営学研究科長を歴任し、2011年に退官。主な著書に『経営組織の環境適応』（白桃書房、1980年）、『組織認識論』（千倉書房、1988年）が、また共著書に『経営戦略論』（有斐閣、1996年）、『ゼミナール経営学入門』（日本経済新聞社、1989年）、『コーポレート・ガバナンスの経営学』（有斐閣、2010年）、『スウェーデン流グローバル成長戦略』（中央経済社、2014年）など多数。



三村浩一 Mimura, Koichi

スリーエムジャパン代表取締役社長、ならびにスリーエムヘルスケア代表取締役社長。1957年生まれ。上智大学経済学部卒業後、住友重機械工業、住友スリーエム、米国3M、インドネシア3M代表取締役、住友スリーエム代表取締役社長を経て2014年9月より現職。



ヘンリー・ミンツバーグ Mintzberg, Henry

モントリオールにあるマギル大学クレグホーン記念講座教授。同大学工学部を卒業後、カナディアン・ナショナル鉄道にてオペレーショナル・リサーチに従事。マサチューセッツ工科大学スローンスクール・オブ・マネジメントでMBAならびに博士号を取得。現在、右派、左派、中道を超えた「リバランス社会」の研究に関心が向いている。主な著書に『マネジャーの仕事』（白桃書房、1993年）、『戦略サファリ』（東洋経済新報社、1999年）、『MBAが会社を滅ぼす』（日経BP社、2006年）、『マネジャーの実像』（日経BP社、2011年）などがある。



中沢孝夫 Nakazawa, Takao

福山大学経済学部教授。一般社団法人経営研究所シニアフェロー。1944年生まれ。高校を卒業後、郵便局勤務、全通本部を経て、45歳の時に立教大学法学部入学。兵庫県立大学教授、福井県立大学教授、2014年4月から現職。専門はものづくり論、中小企業論、地域経済論。1100社（うち100社は海外）への聞き取り調査を行う。主な著書に『中小企業新時代』（岩波新書、1998年）、『中小企業は進化する』（岩波書店、2009年）が、また藤本隆宏氏らとの共編著に『グローバル化と日本のものづくり』（放送大学テキスト、2011年）がある。



西部 邁 Nishibe, Susumu

評論家。元東京大学教養学部教授。隔月刊誌『表現者』顧問、および『表現者』塾塾長。1939年生まれ。東京大学経済学部卒業。横浜国立大学経済学部助教授、東京大学教養学部教授を経て評論家に。著書は、処女作『ソシオ・エコノミクス』（中央公論社、1975年）、『ケインズ〈20世紀思想家文庫7〉』（岩波書店、1983年）、『大衆への反逆』（文藝春秋、1983年）などをはじめ多数。そのなかで、『経済倫理学序説』（中央公論社、1983年）は吉野作造賞を、『生まじめな戯れ』（筑摩書房、1984年）はサントリー学芸賞を、『サンチョ・キホーテの旅』（文藝春秋、1989年）は芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。



太子堂正称 Taishido, Masanori

東洋大学経済学部准教授。1974年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、京都大学経済学研究科博士課程修了。主な共著書に『ビジネス倫理の論じ方』（ナカニシヤ出版、2009年）、『経済思想の中の貧困・福祉—近現代の日英における「経世済民」論』（ミネルヴァ書房、2011年）、『ハイエクを読む』（ナカニシヤ出版、2014年）、『現代の経済思想』（勤草書房、2014年）がある。



田中弥生 Tanaka, Yayoi

大学評価・学位授与機構（現大学改革支援・学位授与機構）教授。日本NPO学会会長。日本光学工業（現ニコン）、笹川平和財団、国際協力銀行、東京大学客員助教授を経て現職。ピーター・ドラッカーの下で非営利組織論を学ぶ。主な著書に『ドラッカー 2020年の日本人への「預言」』（集英社、2012年）、『市民社会政策論』（明石書店、2011年）が、またピーター・ドラッカーの訳書に『非営利組織の「自己評価手法」』『非営利組織の成果重視マネジメント』（いずれもダイヤモンド社、1995年、2000年）がある。



吉川 洋 Yoshikawa, Hirosh

東京大学大学院経済学研究科教授。1951年生まれ。東京大学経済学部経済学科卒業後、イェール大学大学院経済学部博士課程修了（Ph.D.）。ニューヨーク州立大学経済学部助教授、大阪大学社会経済研究所助教授等を経て、現職。日本経済学会2002年度会長。2010年に紫綬褒章を受章。主な著書に『転換期の日本経済』（岩波書店、1999年）、『現代マクロ経済学』（創文社、2000年）、『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ』（ダイヤモンド社、2009年）、『高度成長 日本を変えた6000日』（中公文庫、2012年）などがある。

* 登壇者の略歴は、第7回トボス会議が開催された時のものです。

Shocking Revolutions in Industry, Society, and Environment

Imagining the Landscapes of Japan and the World in 100 Years

「産業・社会・環境」革命の衝撃

——100年後の世界と日本のランドスケープを構想する

日時◎2015年5月29日(金) 13:20~20:30

会場◎六本木ヒルズ森タワー49F アカデミーヒルズ内タワーホール

主催◎ワールド・ワイズ・ウェブ・イニシアティブ(w3i)

協賛◎株式会社TKC、富国生命保険相互会社、株式会社構造計画研究所、

一般社団法人Japan Innovation Network

後援◎国立大学法人政策研究大学院大学、株式会社富士通総研

21世紀は、デジタル・ネットワークとつながったモノとモノ、機械と機械が「会話」する時代になる——。この新しい現実には、「IoT」(モノのインターネット)と呼ばれており、既存の製品やサービス、ビジネスモデル、バリューチェーンなどを創造的に破壊し、競争地図を塗り替え、産業システムをグローバルに再構築するといわれている。そのインパクトの大きさと広さから、第4の産業革命、あるいはインダストリー4.0とも称される。

しかし、18世紀の産業革命が、技術革新と工業化だけでなく、それに伴う社会構造の変化——仕事の分業化や専門分化、生産と消費の分離、労働者階級や資本家の台頭、都市化、家族形態の変化など——とともに語られてきたように、21世紀の産業革命の影響はビジネス界だけにとどまらない。

これまでのトポス会議でも指摘されたように、3Dプリンターに代表されるデジタル・ファブリケーション、クラウド・ファンディングやクラウド・ソーシングによって、生活者へのパワー・シフトがいつそう進むであろう。それは、ソーシャル・イノベーション、環境との共生、企業の地球市民化を推し進め、社会システムのリデザイン、資本主義の改革が促されるだろう。

したがって、いま起こりつつある21世紀の産業革命を、産業人や経済人の視点や関心だけから見ていては、ことわざに言う「群盲象を評す」に等しい。また、現状から演繹的に予測したり、象徴的な事例だけで判断したりすることも同様である。

第8回トポス会議では、インダストリアル・インターネットを推進するリーダー企業のゼネラル・エレクトリック、インダストリー4.0を主導するSAP、日本のIoTを牽引するキーパーソンのほか、22世紀を見通す未来学者、生圏倫理学(エコエティカ)の第一人者、時代の変化に覚醒した農業のイノベーター、デザインと工学を融合させてイノベーション創発を企てるデザイナーらを招き、IoTによって描き出されるランドスケープについて意見交換がなされた。

プログラム

13:30—15:00

トポス①

「IoT 産業革命が描く『新しい現実』」

〈パネリスト〉

SAPシニア・バイス・プレジデント グルプラサッド・シュリニヴァサムルティ

日本GE代表取締役社長兼CEO 熊谷昭彦

経済産業省経済産業政策局審議官 松永 明

〈ビデオ・メッセージ〉

デサーン マネージング・ディレクター | 未来学者 ポール・サフォー

〈モデレーター〉

多摩大学教授 | w3i発起人 紺野 登

キャスター | 草野仁事務所 都築紗矢香

*トポス②③も同じ。

15:00—16:20

トポス②

「100年後の地球：そのランドスケープを構想する」

〈パネリスト〉

青山学院女子短期大学教授 橋本典子

エムスクエア・ラボ代表取締役 加藤百合子

〈ビデオ・メッセージ〉

デサーン マネージング・ディレクター | 未来学者 ポール・サフォー

16:35—18:00

トポス③

「企業が変革する産業システム、社会システム」

〈パネリスト〉

富士通研究所代表取締役社長 佐相秀幸

デジタル・コンバージェンス・アンド・イノベーション・エグゼクティブ・アドバイザー ハリー・ストラッサー

takram design engineering代表 田川欣哉

18:00—18:30

総括

一橋大学名誉教授 | w3i代表発起人 野中郁次郎

18:30—20:30

ネットワーキング・セッション (於六本木アカデミーヒルズ内ライブラリー・カフェ)

〈来賓挨拶〉

富士通代表取締役社長 山本正巳

トボス①

「IoT産業革命が描く『新しい現実』」

まず、シリコンバレー在住の未来学者ポール・サフォー氏のビデオ・メッセージが紹介される。いわく「日本のインターネット戦略は失敗に終わったが、IoTの時代は始まったばかりであり、ポスト工業化社会が本格化していく」。

ドイツでは、IoTをテコにした「インダストリー4.0」が進められているが、その中核的役割を果たしているSAPを代表してグルブラサッド・シュリニヴァサムルティ氏が“Harnessing the Internet of Things: Connect/Transform/Reimagine”というテーマでプレゼンテーション。IoTへの期待と投資は年々高まっていることを具体的に示すと同時に、SAPが顧客と共同で進めてきたイノベーション・プロジェクトの実績（たとえば鉱山のトンネル内、スマート農業、水利や干ばつ対策、傷害リスクのモニタリング、医療のパーソナル化）を紹介し、最後に「産官学の協同のみならず、業界横断的、学際的、国際的な人の交流とパートナーシップが必要である」と締めくくった。

日本GEの熊谷昭彦氏が「フューチャー・オブ・ワーク：次世代の製造業」というテーマで、IoTの最先端を走るゼネラル・エレクトリック（GE）の取り組みについて解説した。「フューチャー・オブ・ワーク」（産業と仕事の未来）を発明するうえで、「インダストリアル・インターネット」（IoTによるハードウェアとソフトウェアの融合）、「アドバンスド・マニュファクチャリング」（デジタル・ファブリケーションをはじめとする新しい製造技術）、「グローバル・ブレイン」（クラウド・ソーシングやオープン・イノベーション）という3つの活動があり、これらはまさに製造業のデジタル革命であると述べた。

最後に、経済産業省の松永明氏は、「ビッグデータ・人工知能がもたらす経済社会の変革」というプレゼンテーションの中で、IoTやビッグデータによって、既存の産業分類では定義できない世界が生まれており、このパラダイム・シフトは、①モノからシステムへの価値の移行、②プロセス変革、③アルゴリズムによって特徴づけられると指摘した。

これらのポジション・トークの後、産業と社会そして環境が三つ巴に変化していく中、これからの働き方、イノベーション、産業政策のあり方、さらには日本経済・日本企業の競争力について意見交換が行われた。

トボス②

「100年後の地球：そのランドスケープを構想する」

トボス①とは異なり、哲学や倫理学、歴史・文化といった視点から現在と未来の課題、そのための実践知について議論する必要性が提起され、今道友信氏が提唱した「エコエティカ」（生圏倫理学）について、彼の後継者であり、この研究分野の世界的権威である橋本典子氏から、産業革命以降、より具体的には20世紀以降、自然のみならず技術に対する新しい倫理態度や倫理体制の必要性からエコエティカが生まれたことが説明された。そして、ドイツの社会哲学者ユルゲン・ハーバーマスとの対話から得た「目覚めた市民たちが連帯する」ことの重要性を強く訴えた。

このエコエティカの考え方を踏まえ、農業と技術を掛け合わせ、新しい農業の発明に取り組んでいる加藤百合子氏は、みずから見出した「農業×∇(any) = Happy」という公式は、∇に「雇用」「健康」「教育」といった社会問題を当てはめても“Happy”という解になること、あらゆるビジネスと同じく、農業においてもお客を増やすには、コミュニケーションの量を増やし、信頼を積み重ねていくことが不可欠であると、現場からの実践知を披露。

途中、トボス①に登場したサフォー氏の「クリエイターズ・エコノミー」（創造者の経済）の到来という趣旨のビデオ・メッセージを紹介。

その後、IoTの世界を考えるうえで、現場や現実をおのれの目で確認する姿勢、個としての人間の育成、自然（環境）における人間、日本人固有のセンシビリティといったヒューマン・オリエンテッドな視点が依然として重要であることが確認された。

トボス④

「企業が変革する産業システム、社会システム」

モデレーターの紺野登から、インターネット・オブ・シングスというよりも、インターネット・オブ・イベント、インターネット・オブ・エブリシング（IoE）ではないかと問題提起がなされる。

富士通研究所の佐相秀幸氏から、「ICTが第4次産業革命を牽引するのは間違いない。IPv6が主流になれば（現在はIPv4）、それまで約43億個だったIPアドレスが約340^{かん}澗（澗は、1兆の3乗）個まで使えるようになる。つまり、ほぼ制約がなくなることで、『ハイパー・コネクティッド・クラウド』、すなわちあらゆるデータがつながっていく世界が生まれる。そこでは、何らかの特長を備えたプラットフォームが2次元3次元につながり、新たな価値を創造し、さらに新たな産業、新たな社会を生み出す」という、近未来予測が示された。

シーメンスやフィリップスのR&D部門のトップを務めたハリー・ストラッサー氏が、“Connected Body – Connected Life”というテーマで、フィットネス・トラッカーとスマート・ウォッチ、スマート・グラス、電子入れ墨など、ウェアラブル技術の今後について説明。また「拡散」(divergence)と「収れん」(convergence)という考え方に基づいて、さまざまな業種で構成される新しいバリューチェーンが生まれ、新興企業と大企業が協働することで、古典的なR&Dとオープン・イノベーションやソーシャル・イノベーションが組み合わされていく、と持論を披露した。

デザインとエンジニアリングの両方の視点から新しい価値づくりに取り組む田川欣哉氏は、ビッグデータのビジュアル化など、自身が携わったプロジェクトを紹介。その中で得た知見として、大企業では、プロジェクトも、意思決定も、組織も、要素還元主義的であるがゆえ、越境性のある活動や仕組みが必要なのではないか、またビジネス、テクノロジー、クリエイティブを兼ね備えた「BTC型人材」の育成が喫緊の課題であるなどを指摘した。



橋本典子 Hashimoto, Noriko

青山学院女子短期大学教授。エコエティカ国際シンポジウム、ならびにトモノブ・イマミチ・インスティテュート・フォー・エコエティカ事務局長。1948年生まれ。東京大学文学部卒業、東京大学人文科学研究科修了（美学藝術学）、東京大学文学部助手、放送大学助教授、青山学院女子短期大学助教授を経て現職。主な著作に『存在を超えて』（哲学美学比較研究国際センター、2007年）、また今道友信氏との共編著に『美の本質と様態』（放送大学教育振興会、1987年）がある。



加藤百合子 Kato, Yuriko

エムスクエア・ラボ代表取締役。1974年生まれ。東京大学農学部卒業後、英国クランフィールド大学で修士号取得。その後、NASAのプロジェクトに参画。帰国後、キャノン入社。農業の社会性の高さに気づき、2009年に同社を設立。2012年青果流通を変える「ベジプロバイダー事業」で日本政策投資銀行第1回女性新ビジネスプランコンペティション大賞受賞。「地産来消」（地域で産出された食材を、その地域へ来訪した人がレストランや宿泊施設等で消費すること）という言葉の生みの親。



熊谷昭彦 Kumagai, Akihiko

日本GE代表取締役社長兼CEO。ならびに、GEヘルスケア・アジアパシフィックプレジデント兼CEO、GEヘルスケア・ジャパン代表取締役会長、米国ゼネラル・エレクトリックのコーポレート・オフィサー（本社役員）を兼ねる。1956年生まれ。カリフォルニア大学ロサンゼルス校経済学部卒業後、三井物産を経て、米国GEに入社。日本GEプラスチックス代表取締役社長、GE東芝シリコン代表取締役社長兼CEO、GEコンシューマー・ファイナンス代表取締役社長兼CEO、GE横河メディカルシステム（現GEヘルスケア・ジャパン）代表取締役社長兼CEO等を歴任し、2011年より現職。



松永明 Matsunaga, Akira

経済産業省経済産業政策局大臣官房審議官（経済産業政策局担当）。独立行政法人経済産業研究所（RIETI）コンサルティングフェロー。1961年生まれ。東京大学法学部卒業後、通商産業省（現経済産業省）入省。ハーバード・ロー・スクールで法学修士号を取得。長崎大学経済学部教授、経済産業政策局産業構造課長、大臣官房会計課長、中小企業庁事業環境部長等を経て、2014年より現職。



ポール・サフォー Saffo, Paul

デザインのマネージング・ディレクター。未来学者。スタンフォード大学工学部コンサルティング准教授、同大学メディアXリサーチ・ネットワーク客員研究員。そのほか、ベイ・エリア・カウンシル・エコノミクス・インスティテュート理事、ロング・ナウ財団理事。スウェーデン王立理工学アカデミーのフェロー、シンギュラリティ大学フューチャー・トラック委員などを兼ねる。



佐相秀幸 Saso, Hideyuki

富士通研究所代表取締役社長、ならびに富士通取締役。工学博士。1952年生まれ。東京工業大学工学部制御工学科卒業後、富士通入社。経営執行役員兼モバイルフォン事業本部長、執行役員常務兼ユビキタスプロダクトビジネスグループ長、執行役員副社長兼マーケティング部門長兼次世代テクニカルコンピューティング開発本部担当、代表取締役副社長兼 CTO&CMO 兼マーケティング部門長兼次世代テクニカルコンピューティング開発本部担当等を歴任し、2014年より現職。



グループラサッド・シュリニヴァサムルティ Srinivasamurthy, Guruprasad

SAP シニア・バイス・プレジデント兼カスタマー・イノベーション & ストラテジック・プロジェクト担当グローバル・ヘッド。カリフォルニア大学バークレー校ハース・ビジネススクールでMBA、南カリフォルニア大学でコンピュータ・サイエンスの修士号を取得。SAP 内400超の組織をグローバルかつクロスファンクショナルに横断し、新しいビジネスモデルを確立して初めて新技術を活用できるホワイトスペースや未開拓分野を切り開くイノベーション活動に従事。



ハリー・ストラッサー Strasser, Harry

デジタル・コンバージェンス・アンド・イノベーション・エグゼクティブ・アドバイザー。サービスファクタム共同設立者兼マネージング・パートナー、また、ウェアラブル・テクノロジー、ナビスペース、ニュー・モビリティ・ワールド各社のパートナーを兼ねる。元シーメンスCTO、元フィリップス・チーフ・ストラテジー&マーケティング・オフィサー。「ヒューマン・セントリック・コネクテッド・ワールド」というコンセプトに基づき、IoT分野の技術ビジョナリーとして、講演、コンサルティング等、世界各国で活動中。



田川欣哉 Tagawa, Kinya

takram design engineering 代表。英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アート (RCA) 客員教授。1976年生まれ。東京大学機械情報工学科卒業後、RCA インダストリアル・デザイン・エンジニアリング (現イノベーション・デザイン・エンジニアリング) で修士号を取得。未踏ソフトウェア創造事業スーパークリエイター認定。主なプロジェクトに、トヨタ自動車「NS4」、無印良品「MUJI NOTEBOOK」のユーザーインタフェースの設計とデザインなどがある。日本語入力機器「tagtype」はニューヨーク近代美術館のパーマネントコレクションに選定されている。

* 登壇者の略歴は、第8回トボス会議が開催された時のものです。

Innovating Cities

Phronetic Cities for the 21st Century

都市のイノベーション

——21世紀における都市の賢さを求めて

日時●2015年11月18日(水) 13:20~20:30

会場●六本木ヒルズ森タワー49F アカデミーヒルズ内タワーホール

主催●ワールド・ワイズ・ウェブ・イニシアティブ(w3i)

協賛●株式会社TKC、富国生命保険相互会社、株式会社構造計画研究所

後援●国立大学法人政策研究大学院大学、株式会社富士通総研

2015年6月、グーグルは、都市イノベーションを専門とする「サイドウォーク・ラボ」、世界中の都市とそこに住む市民たちを結びつける「インターセクション」という、2つの新ビジネスを立ち上げた。

同社創業者のラリー・ペイジいわく、「都市を改善することによって、何十億人という人々の生活を向上させられる」。彼らは、元ニューヨーク副市長のダニエル・ドクトロフをリーダーに迎え、まずニューヨーク市のイノベーションに取り組むという意気込みを見せている。

アメリカの市民活動家ジェイン・ジェイコブズは、経済の発展を先導するのは国家ではなく「都市」であると訴えた。それは、都市の持っている多様性こそ、需要の創出、新しい製品やサービスの開発、雇用の創造の源泉だからである。こうした「都市の生み出す力」（いわゆる「ジェイコブズ効果」）を引き出すには、行政によるトップダウンよりも、市民やコミュニティによるボトムアップが望ましい。

このようなチャレンジは、知の多様性とソーシャル・キャピタル（社会関係資本）をテコに、まさしくボトムアップによって都市イノベーションを起こそうという試みである。言い換えれば、市民中心、そして市民参加の都市イノベーションを志向している。

この都市イノベーションは、日本にとっても大きな課題である。実際、さまざまな学術機関やプロフェッショナル・サービス会社が、都市イノベーションに関する世界ランキングを発表しているが、日本の都市はそのほとんどすべてにおいてトップ10に入っていない。とはいえ、こうした厳しい現実には、裏返せば、伸びしろの大きさを示している。

第9回トボス会議では、こうした問題意識の下、「エッジ・シティ」（周縁都市）という概念の提唱者、都市社会学の世界的研究者、ヨーロッパ「リビング・ラボ」の推進者を招聘し、実際に都市設計と都市開発を実践する経営者らとともに、日本の都市イノベーションのあり方について議論を交わした。

プログラム

13:30—15:00

トポス①

「グローバル都市と経済」

〈パネリスト〉

アリゾナ州立大学法学部リンカーン記念講座教授 | 元『ワシントン・ポスト』紙編集者 ジョエル・ガロー

日建設計取締役副社長執行役員 中分 毅

コロンビア大学社会学部教授 サスキア・サッセン

〈モデレーター〉

多摩大学教授 | w3i発起人 紺野 登

キャスター | 草野仁事務所 羽田未蘭野

*トポス②③も同じ。

15:00—16:20

トポス②

「都市のオープン・イノベーション」

〈パネリスト〉

欧州委員会通信ネットワーク・コンテンツ・技術総局イノベーション担当アドバイザー ブロール・サルメリン

同上 サスキア・サッセン

〈ビデオ・メッセージ〉

ニューヨーク市立大学大学院名誉教授 デヴィッド・ハーヴェイ

川崎市市長 福田紀彦

16:35—18:00

トポス③

「企業の都市イノベーション」

〈パネリスト〉

東京急行電鉄取締役社長 野本弘文

細尾代表取締役社長 細尾真生

同上 ジョエル・ガロー

18:00—18:30

総括

一橋大学名誉教授 | w3i代表発起人 野中郁次郎

18:30—20:30

ネットワーキング・セッション (於六本木アカデミーヒルズ内ライブラリー・カフェ)

〈来賓挨拶〉

富士通執行役員常務兼CTO&CIO 松本端午

トボス①

「グローバル都市と経済」

自己組織化によって大都市郊外に生成された都市「エッジ・シティ」（周縁都市）という概念を提唱したジョエル・ガロー氏が、ニューヨーク、パリ郊外のマルヌ＝ラ＝ヴァレなどの事例を引きながら、エッジ・シティ1.0について解説。しかしインターネットの登場によって、人々の生活や働き方、コミュニティ内の産業（特に小売業）に変化が生じ、エッジ・シティの生成プロセスや都市の役割も変わりつつあると指摘。それは言わばエッジ・シティ2.0であり、米ニューメキシコ州サンタフェ、モロッコのマラケシュなどはその原型であると述べるとともに、アラン・ケイの「未来を予測する最善の方法は、それを発明することだ」を引用し、締めくくった。

このプレゼンテーションを受けて、日建設計の中分毅氏は、「グローバル・シティ・アンド・エッジ・シティ」というテーマで、まず両者の相違点と相互補完性について説明した後、都市としての東京について考察。そして、東京をイノベティブな都市として再創造する方策として、①職住近接をいっそう推し進める、②パブリック・スペースの量と質を高める、③サブ・センターの個性化を推進する、④現在の東京の発展を支えてきた場所を重視することを指摘した。

ジェイン・ジェイコブズと同じく、国ではなく「都市」を経済の基本単位として考えるサスキア・サッセン氏は、「グローバル・シティ・ダイナミクス」というテーマでプレゼンテーション。いわく「グローバル都市には、企業や投資、知識が集まってくるが、中心地というよりも、むしろ媒介者あるいは代理人という役割を果たしている」。

3人のポジショントークの後、「経済活動の単位として、国よりも都市が重要になる」という仮説について、ムードメーターを実施。参加者からは圧倒的な支持が示された。

トボス②

「都市のオープン・イノベーション」

ヨーロッパで広がっている「リビング・ラボ」の推進者の一人、ブロール・サルメリン氏が、「オープン・イノベーションのエコシステム：ヨーロッパにおける取り組み」というテーマの下、市民・大学・企業・自治体などのコラボレーション、イノベーションと都市経済の関係などに言及しながら、リビング・ラボの活動、オープン・イノベーション2.0について紹介。そして、コミュニティとその構成メンバーである市民一人ひとりの「ソーシャル・キャピタル」（人間関係資本）を強化・活用することがカギであり、ヘンリー・チェスブローが唱えた1.0の世界との大きな違いであると指摘するとともに、自身の経験に基づきながら、都市はイノベーション・エコシステムとしての機能を持っていると述べた。

このプレゼンテーションの後、地理学・経済地理学の分野で著作が世界一引用されているデヴィッド・ハーヴェイ氏から寄せられた、「都市における空間と資本」の理論を軸に、グローバル化が進む社会における都市イノベーションの意味に関するビデオ・メッセージを、全員で共有。

続いて、神奈川県川崎市の改革に取り組む若き市長福田紀彦氏のビデオ・メッセージを紹介。同市では、イノベーションの主役を「市民」と据えたうえで、3つのイノベーション・イニシアティブ——「グリーン」「ウェルネス」「ライフ」——を通じて産学官や自治体間の連携を積極的に推進しており、都市イノベーションにおける行政の重要性を再確認することとなった。

「企業の都市イノベーション」

さまざまな都市との連携を図りながら「ワイズ・シティ」という次世代のまちづくりに取り組んでいる東京急行電鉄取締役社長の野本弘文氏が、「東急のまちづくり：螺旋的発展の追求」というテーマでプレゼンテーション。「選ばれる沿線」であり続けるために沿線価値の向上を目指して、いまや世界的なエンタテインメント・シティと評価されている渋谷と、東京圏におけるエッジ・シティである二子玉川の再開発事業、そして「クリエイティブシティ・コンソーシアム」の活動について紹介。

1688年に創業された西陣織の老舗細尾の11代目、細尾真生氏は、「世界で最も訪れたい街ランキング」第1位の京都の街において、いかに伝統を守りながら革新を遂げていくかというバランスが難しい課題について、クリスチャン・ディオールのニューヨーク店のインテリアのファブリックを手がけたことを契機に、ルイ・ヴィトン、ザ・リッツ・カールトン、フォーシーズンズホテル、さらには靴メーカー、カメラのライカなどとのコラボレーションが始まったことを紹介。そして、多種多様な価値観や文化と融合・交流することで、都市のイノベーションが生まれてくると締めくくった。

2人のプレゼンテーションの後、ガロー氏を交えて、けっして平均的な人材ではなく多様な才能を組み合わせる必要性、オープン・イノベーションの場としての都市（およびパブリック・スペースという都市空間）の重要性、バウンダリー・オブジェクトとしての都市、といった視点からの議論が行われた。



福田紀彦 Fukuda, Norihiko

第12代川崎市市長。1972年生まれ。1995年、ファーマン大学卒業。松沢成文衆議院議員公設第一秘書を経て、2003年、神奈川県議会議員選挙（川崎市宮前区）に民主党公認で初当選し、県議会最年少議員となる。2009年10月、川崎市長選挙に無所属（民主党推薦）で出馬（落選）、神奈川県知事秘書、早稲田大学マニフェスト研究所客員研究員等の後、2013年11月、川崎市長選に当選、現在に至る。



ジョエル・ガロー Garreau, Joel

アリゾナ州立大学法学部リンカーン記念講座教授。また、ケンブリッジ大学、カリフォルニア大学バークレー校、ジョージ・メイソン大学のフェローを務める。元『ワシントン・ポスト』紙の記者および編集者。「エッジ・シティ」という概念を提唱したことで知られる。2005年に上梓した*Radical Evolution* (Doubleday, 2005) は、人類による急速な進化と歴史的な変曲点の到来について予測した書として話題になった。



デヴィッド・ハーヴェイ Harvey, David

ニューヨーク市立大学大学院名誉教授。専門は人文地理学・社会理論・政治経済学。今日、地理学分野では、世界で最も多く論文が引用される研究者で、スウェーデンのレツツイウス金メダル、イギリス王立地理学会のパトロン・メダル、ヴォートリン・ルド国際賞などの多くの受賞歴を誇る。『ポストモダニティの条件』（青木書店、1999年）、『ニュー・インペリアリズム』（青木書店、2005年）、『新自由主義』（作品社、2007年）、『〈資本論〉入門』（作品社、2011年）、『反乱する都市』（作品社、2013年）をはじめ、20余冊の著作がある。



細尾真生 Hosoo, Masao

細尾代表取締役社長。一般社団法人京都経済同友会副代表幹事。同志社大学ビジネススクール講師。1953年生まれ。同志社大学経済学部卒業後、伊藤忠商事。伊ミラノのノートンズ社に出向し、帰国後、細尾に入社。2000年より現職。西陣織の技術と素材を活用した、新しい織物事業を立ち上げ、ニューヨークのソーホー地区にショールームを開設するなど、グローバルに展開している。



中分 毅 Nakawake, Takeshi

日建設計取締役副社長執行役員。京都大学工学部衛生工学科卒業。筑波大学大学院環境科学研究科修了。現在、アジアや中東の湾岸協力会議加盟（GCC）諸国、独立国家共同体（CIS）諸国におけるビジネス開発を指揮。これまで、ベトナム・ホーチミン市マスタープランの改定、中国広東省深圳市の深圳北駅開発計画、中国大連普蘭店市バイエリア開発計画および都市設計、台湾台北南港経済技術地区開発計画、東京都豊洲地区開発整備計画などのプロジェクトを手がける。



野本弘文 Nomoto, Hirofumi

東京急行電鉄取締役社長兼社長執行役員。1947年生まれ。早稲田大学理工学部卒業後、東京急行電鉄入社。東急不動産出向、イツ・コミュニケーションズ代表取締役社長、東京急行電鉄常務取締役、代表取締役専務取締役などを歴任し、2015年より現職。社長就任時より「3つの日本一」——東急沿線を「日本一住みたい沿線」、渋谷を「日本一訪れたい街」、二子玉川を「日本一働きたい街」にする——というテーマを掲げ、その開発に取り組む。



ブロール・サルメルン Salmelin, Bror

欧州委員会の通信ネットワーク・コンテンツ・技術総局イノベーション担当アドバイザー。また、同委員会において「オープン・イノベーション2.0」を推進するOISPG（Open Innovation Strategy and Policy Group）のリーダーの一人。ヘルシンキ工科大学工学部電子工学科で修士号を取得。ヨーロッパ各国に350以上の拠点を持つ「リビング・ラボ」のコンセプトの開発者で、ICTを利用した市民の共創型サービスの開発と導入に取り組む。



サスキア・サッセン Sassen, Saskia

コロンビア大学ロバート・S・リンド記念講座教授、ならびに同大学グローバル・ソート委員会チエア。都市社会学、グローバル都市論、移民研究が専門。オランダで生まれた後、アルゼンチン、イタリアで育ち、フランスで学び、現在アメリカ・ニューヨークで暮らす。邦訳されている著書に、『労働と資本の国際移動』（岩波書店、1992年）、『グローバル・シティ』（筑摩書房、2008年）、『グローバル化の時代』（平凡社、1999年）、『グローバル空間の政治経済学』（岩波書店、2004年）、『領土・権威・諸権利』（明石書店、2011年）がある。

* 登壇者の略歴は、第9回トボス会議が開催された時のものです。

Human Building in the Anthropocene Age

Creating Next Generation Pioneers

人類世の“ヒューマン・ビルディング”

——「次世代を拓く人間」をいかに創造するか

日時●2016年6月30日(木) 13:20~20:30

会場●六本木ヒルズ森タワー49F アカデミーヒルズ内タワーホール

主催●ワールド・ワイズ・ウェブ・イニシアティブ(w3i)

協賛●株式会社TKC、富国生命保険相互会社、株式会社構造計画研究所

後援●国立大学法人政策研究大学院大学、株式会社富士通総研

「人類世」(じんるいせい: Anthropocene)は、われわれ人類の多くの活動が地球の動的均衡システムを脅かしている状態にあることを示す言葉で、地球規模の危機ともいわれる。この問題を回避し、さらなる繁栄を実現するには、地球レベルの高い視点と広い視野を持って行動することが求められる。つまり、これまでのトポス会議でも議論してきたように、誰もが「実践知」を体現するリーダーとなり、共通善に向かって日々共創に努めることが肝要と言える。

実践知の基盤やその育成方法については過去にも議論してきたが、節目となる第10回では、日本における現象学研究の第一人者である山口一郎氏を招き、トポス会議の代表発起人である野中郁次郎との対話を通じて、実践知と知識創造の基礎となる「間身体性」や「相互主観性」について、あらためて理解を深めるとともに、人類の倫理性や道徳性、さらには情熱や信念の源泉について意見を交わした。

この共創的セッションを踏まえた第2のセッションでは、ヨーロッパのリビング・ラボ、「定年のない会社」「和敬塾」の取り組みで知られる前川製作所のプレゼンテーションを通じて、「次世代を担う」あるいは「未来を拓く」人間を育成する環境やリーダーシップについて考察を試みた。

最後のセッションでは、人間の可能性を無限に広げるさまざまな取り組みについて、能のメソッド等を用いて自閉症児を支援する能楽師、既存の学校や企業の教育システムの限界を訴える教育学者、徒弟制度の意義を再発見した企業経営者の考え方や実践を聞きながら、最終回の最終セッションにふさわしく、われわれ人類が21世紀をいかに賢く生きることができるか、そしていかに未来を創造し続けていくかについて議論を行った。

プログラム

13:30—14:40

トポス①

「人間の進化と身体性」(対談)

東洋大学名誉教授 | 哲学者 山口一郎

一橋大学名誉教授 | w3i代表発起人 野中郁次郎

14:40—16:20

トポス②

「次世代を創る社会」

〈パネリスト〉

前川製作所顧問 前川正雄

レアルマドリッド・フットボール部門総務代表 ホセ・ラモン・カプデヴィラ

エデュコア創設者兼取締役 | フェューチャー・センター・アライアンス創設者兼ディレクター ハンク・クーネ

〈モデレーター〉

多摩大学教授 | w3i発起人 紺野 登

キャスター | 草野仁事務所 都築紗矢香

*トポス③も同じ。

〈ビデオ・メッセージ〉

スターマン・コンサルタンシー・エグゼクティブ・ディレクター | 元ラーテナウ研究所所長 ヤン・スターマン

富士通代表取締役社長 田中達也

16:35—18:00

トポス③

「日本の若者の未来」

〈パネリスト〉

秋山木エグループ代表 秋山利輝

東京大学大学院教育学研究科教授 本田由紀

ワキ方下掛宝生流能楽師 安田 登

18:00—18:30

総括

同上 野中郁次郎

18:30—20:30

ネットワーキング・セッション (於六本木アカデミーヒルズ内ライブラリー・カフェ)

〈来賓挨拶〉

富士通代表取締役会長 山本正巳

トボス①

「人間の進化と身体性」

アートとサイエンスを総合する哲学といえる「現象学」の有用性について、代表発起人の野中郁次郎と、日本を代表するフッサール現象学の研究者である山口一郎氏が対談。

まず山口氏より、現象学はそもそもあらゆる先入観を排し、意識に直接表れたもの、直観されたものに対し、内在としての絶対性を認めるものであり、実は合理主義哲学の祖であるルネ・デカルトがあらゆるものを疑い、削ぎ捨てていった後、自分の感じている思いだけは絶対疑い切れないと考えるに至った瞬間に生まれた「我思うゆえに我あり」が現象学の出発点になっていることを説明。そして、「時間意識」の働きを示す言葉である「過去把持」（かこはじ | retention）と「未来予持」（みらいよじ | protention）について、ベンジャミン・リベットが『マインド・タイム』（岩波書店）で示した内外を問わず刺激を受けて意識化するには0.5秒の脳内活動を要すること、にもかかわらず、イチローをはじめ一流のスラッガーはなぜヒットを量産できるのかを紹介しながら解説。

これを受けて、野中が、人間の直感、分析から始まるものではなく、無意識も含めて脳と身体による過去把持に基づいており、そこから未来予持が生まれる、だからこそ進歩や進化、イノベーションには、個々人の主観がきわめて重要であると主張。

以降、主観が生まれてくる原点は母子関係にあり、オーストリアの哲学者マルティン・ブーバーの『我と汝・対話』（みすず書房）にも言及しながら、それゆえ主観は他者への共感から生まれること、こうした複数の主観が共同化されることを「相互主観性」（間主観性）と呼び、かつての本田技研工業の「ワイガヤ」はその形成プロセスであったことなど、2人の意見交換が続き、最後に野中が、第1回のトボス会議ではシンギュラリティを議論したことを提起し、あらためて暗黙知の重要性を訴えて締めくくった。

トボス②

「次世代を創る社会」

冒頭、トボス①の最後で紹介されたオランダ・ラーテナウ研究所所長を務めたヤン・スターマン氏によるビデオ・メッセージで述べられた、社会やコミュニティが人間の育成や能力開発を担っていくという考え方があらためて示される。

「共同生活を通じた人間形成」を目指して和敬塾という私塾を設立した前川製作所の前川正雄氏が、戦後の教育は知識偏重であり、前川製作所では、学歴を問わず入社3年間は寮生活をさせ、仕事の現場では身体で憶えることを徹底していることを紹介。また、イノベーションには非日常的な場が必要だが、実は、若者よりも経験の質と量で圧倒的に勝るシニア社員が主導的な役割を果たしている、ただし老若が交わることが重要と指摘。

世界的なサッカー・チーム、リアルマドリッドで戦略立案のほか、社会貢献活動にも従事するホセ・ラモン・カプデヴィラ氏から、自己啓発のグループであるトニー・ロビンスの「成功者が持っている7つの特性」——①情熱 (passion)、②信念 (belief)、③戦略 (strategy)、④明確な価値観 (clarity of values)、⑤エネルギー (energy)、⑥対人関係力 (bonding power)、⑦コミュニケーション力 (mastery of communication) ——について説明があり、シェアリング経済、クラウド・ファンディング、ビッグデータ、エクスポネンシャル (指数関数的) 技術や組織などの登場によって、新しいリーダーが世界各地で登場しており、その支援を行っていることが紹介された。

ヨーロッパ各国のフューチャー・センターやリビング・ラボで中核的な役割を果たしているハンク・クローネ氏は、カナダのメディア・文明評論家マーシャル・マクルーハンが述べた「我々はバックミラーを

通して現在を見ており、未来に向かって後ろ向きに進んでいる」というパラドックスを引きながら、未来に向けた行動の重要性を強調。そして、フィンランドの「エスポー・イノベーション・パーク」、小中学校向けの創造性開発プログラム「ウィ・ラーン・イット」、アイルランド・ダブリンで始まった草の根のプログラミング教室「コーダー・ドージョー（道場）」、エストニアの若者たちが始めた「レッツ・ドゥ・イット」などコミュニティ発の活動を紹介した。

また、富士通代表取締役社長の田中達也氏からのビデオ・メッセージでは、富士通が掲げる「ヒューマン・セントリック」な社会についてのプレゼンテーションがあり、未来の創造には「つながる社会」「価値の共有」が不可欠であるという言及があった。

トボス③

「日本の若者の未来」

徒弟制度を採用していることで知られる秋山木工グループ代表の秋山利輝氏が、自己紹介の後、若い丁稚2名（若泉和武氏、河原久美子氏）を登壇させ、若泉氏が同社の「職人心得30箇条」を唱和。秋山氏は、「一流の職人になるには人間性が第一である」という持説を披露するとともに、若者を鍛えることがなござりにされているのではないかと問題提起して、プレゼンテーションを終えた。

これに続いて、若者の研究で知られる教育社会学者の本田由紀氏が、「若者への目線を新たに」というテーマで、まず若者の能力に関する国際比較調査の結果を説明しながら、日本の若者は言語能力や数的能力などは相対的に高いものの、実は自己肯定感が低く、閉塞感が強いという特徴があることを指摘。その原因には、労働市場の荒廃、低賃金、社会保障の機能不全等のほか、人間性や地頭など抽象的な能力によって恣意的な評価がまかり通っていることにありと批判し、こうした茶番はいい加減やめて、稼げる知識やスキルを具体化し、それを教えるべきであると訴えた。

最後は、能楽師でありながら、自閉症児と一緒に奥の細道を歩く活動を行っている安田登氏が、まず能楽、特に夢幻能における4つの改革——室町時代において豊臣秀吉によって着物が高価になる、徳川綱吉の時代ではスピードが遅くなる、明治時代に屋内で演じられるようになる、戦後になって入場料によって興行する——について説明したうえで、世阿弥の「初心忘るべからず」は、自己変革には過去のいっさいを捨て去れという意味であること、厳格な内弟子制度にはさまざまな約束が課されるが実は（内緒で）破らなければいけないこと、師匠の真似をしていると「無主風」と批判されることなど、能楽の徒弟制度の実際について解説した。

3人のプレゼンテーションの後、「徒弟制度は時代遅れであり、やめるべきだ」と投げかけて（本田氏より徒弟制度の定義が必要という指摘を踏まえたうえで）ムードメーターを実施。最後に、日本の若者の潜在能力は高く、それを引き出すために社会を変えていく行動が必要であることが確認された。



秋山利輝 Akiyama, Toshiteru

秋山木工グループ代表。一般社団法人秋山学校代表理事。1943年生まれ。中学卒業とともに、家具職人への道を歩み始め、1971年に秋山木工を設立。同社の特注家具は、迎賓館や国会議事堂、宮内庁、有名ホテルなどで採用されている。また2013年、技能五輪全国大会家具競技の部にて、同社の選手全員が受賞、金銀銅メダルを独占。著書に『丁稚のすすめ』（幻冬舎、2009年）『一流を育てる』（現代書林、2014年）がある。



ホセ・ラモン・カプデヴィラ Capdevila Xam-mar, Jose Ramón

レアルマドリッド・フットボール部門総務代表。スペインの ESADE にて MBA を取得。またスタンフォード大学経営大学院のエグゼクティブ MBA を修了。現在、同チームの戦略の企画・立案に従事。そのほか、ビジネスとスポーツ領域を融合させたベンチャー企業の育成、両領域のシナジーの創出にも取り組んでいる。



本田由紀 Honda, Yuki

東京大学大学院教育学研究科教授。1964年生まれ。日本学術会議会員。東京大学教養学部卒業。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。教育学博士。日本労働研究機構研究員、東京大学社会科学研究所助教授等を経て、2008年より現職。専門は教育社会学。教育・仕事・家族という3つの社会領域間の関係について実証研究に取り組む。主な著書に『若者と仕事』（東京大学出版会、2005年）、『多元化する「能力」と日本社会』（NTT出版、2005年 | 第6回大佛次郎論壇賞奨励賞）、『軋む社会』（双風舎、2008年）、『もじれる社会』（ちくま新書、2014年）など。



ハンク・クーネ Kune, Hank

オランダ・アムステルダムにあるエデュコア創設者兼取締役。フューチャー・センター・アライアンス創設者兼ディレクター。これまで、オランダの公的機関、日本、フィンランド、スウェーデン、ドイツ、ブリュッセルにおいて、さまざまなイノベーション・イニシアティブやコンサルティングに従事。



前川正雄 Maekawa, Masao

前川製作所顧問。公益財団法人和敬塾理事長。1932年生まれ。早稲田大学理工学部工業経営学科卒業後、前川製作所入社。代表取締役社長、代表取締役会長、取締役会長、取締役名誉会長を歴任した後、2009年6月より現職。2003年、渋沢栄一賞を受賞。主な著書に『モノづくりの極意、人づくりの哲学』（ダイヤモンド社、2004年）、『世界を変える「場所的経営」』（実業之日本社、2009年）、『再起日本!』（ダイヤモンド社、2013年）が、また清水博氏との共著に『競争から共創へ』（岩波書店、1998年）がある。



ヤン・スターマン Staman, Jan

スターマン・コンサルタンシー・エグゼクティブ・ディレクター。元オランダ・ラーテナウ研究所所長。専門は、獣医学、法学。2015年1月に同研究所を退職し、科学・社会・政府を取り巻く破壊的技術とそれらをめぐる対立について調査・研究するコンサルティング会社を設立。



田中達也 Tanaka, Tatsuya

富士通代表取締役社長。1956年生まれ。東京理科大学理工学部経営工学科卒業後、富士通入社。富士通有限公司（現富士通情報システム株式会社）の日系統括営業部総経理、董事兼副総経理、富士通執行役員兼産業・流通営業グループ産業ビジネス本部長、執行役員常務兼 Asia リージョン長、執行役員副社長等を歴任し、2015年より現職。



山口一郎 Yamaguchi, Ichiro

東洋大学名誉教授。1947年生まれ。上智大学文学研究科哲学専攻修士課程修了。ミュンヘン大学哲学部哲学科にて博士号（Ph. D.）取得。独ノルトラインヴェストファーレン州ボッフム大学哲学部にて哲学教授資格（Habilitation）取得。東洋大学文学部教授を経て、2016年に同大学名誉教授。主な著書に『人を生かす倫理』（知泉書館、2008年）、『実存と現象学の哲学』（日本放送出版協会、2009年）、『感覚の記憶』（知泉書館、2011年）が、またフッサールの訳書に『受動的総合の分析』（国文社、1997年）、『間主観性の現象学』（筑摩書房、2012年）がある。



安田 登 Yasuda, Noboru

ワキ方下掛宝生流能楽師。米コロラド州ボルダーにあるロルフ・インスティテュート公認ロルファー（ボディワーク・ロルフイング施術者）。1956年生まれ。『論語』を学ぶ寺子屋「遊学塾」を主宰し、全国で出張寺子屋を実施。主な著書に『能に学ぶ身体技法』（ベースボール・マガジン社、2005年）、『ワキから見る能世界』（生活人新書、2006年）、『身体感覚で『論語』を読みなおす。』（春秋社、2010年）、『異界を旅する能』（ちくま文庫、2011年）、『身体感覚で芭蕉を読みなおす。』（春秋社、2012年）などがある。

*登壇者の略歴は、第10回トボ会議が開催された時のものです。



〈代表発起人〉

野中郁次郎 Nonaka, Ikujiro

一橋大学名誉教授。富士通総研経済研究所前理事長、ならびに前実践知研究センター長。クレアモント大学大学院ドクター・スクール名誉スカラー。早稲田大学政治経済学部卒業。カリフォルニア大学経営大学院（バークレー校）にて博士号（Ph.D.）を取得。2008年5月、『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙で「最も影響力のあるビジネス思想家トップ20」に選ばれる。



〈発起人〉

紺野 登 Konno, Noboru

多摩大学大学院教授。一般社団法人ジャパン・イノベーション・ネットワーク代表理事。そのほか、KIRO 代表、目的工学研究所所長、東京大学 i.school エグゼクティブ・フェロー、慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科特別招聘教授、日建設計顧問などを兼ねる。ナレッジ・エコロジー（知の生態学）をテーマに、知識経営、ワークプレース戦略、デザイン戦略プロジェクトの研究・実務に関わる。

〈アソシエート〉

浜屋 敏 Hamaya, Satoshi

富士通総研経済研究所研究主幹。早稲田大学 IT 戦略研究所客員研究員。

岩崎卓也 Iwasaki, Takuya

w3i プログラム・ディレクター。元『ハーバード・ビジネス・レビュー日本版』編集長。

眞野美香 Mano, Mika

富士通総研経済研究所。

西田治子 Nishida, Haruko

w3i プログラム・ディレクター。マッキンゼー・アンド・カンパニーを経て、オフィス・フロンテス代表。

吉田倫子 Yoshida, Michiko

富士通総研経済研究所主任研究員。

冨師敬子 Zushi, Takako

富士通総研経済研究所。

2017年1月27日発行
非売品

ワールド・ワイズ・ウェブ・イニシアティブ（トポス会議）事務局
〒105-0022
東京都港区海岸1丁目16-1 ニューピア竹芝サウスタワー7階
富士通総研経済研究所
03-5401-8392（代表）

©2017 World Wise Web Initiative.
Printed in Japan

